

# 南風

田富南小校長通信 No.4  
令和6(2024)年7月9日(火)  
文責 雨宮 実

## 5年生 田植え

田植えは、この時期の風物詩でもあります。田に水が張られ、あちこちからカエルの鳴き声が聞こえてくる時期となりました。梅雨と夏の到来を感じます。

本校でも5年生がこの時期に田植えを行っています。6月25日(火)に代掻きとして「5年生ドロリンピック」を行いました。水球(?)のようなゲームをしたり、リレーをやったりと泥まみれになりながらも楽しそうに動き回っていました。



その1週間後の7月1日(月)に、保護者や教職員の助けも借りながら5年生皆で田植えを行いました。現代は田植え機で効率よく田植えを済ませてしまうことができますが、昔ながらの手植えで行いました。時間はかかりましたが、無事に田植えを終えることができました。

最近、高齢化等の事情で稲作をやめてしまう農家が目につきます。私の住むところ(甲斐市の旧双葉地区)



でも昨年までの田んぼが造成されて住宅地になっているところがあちこちに見られます。これも時代の流れか、と思うところですが、この日本において、縄文時代の終わりごろから始まった長い歴史のある、また、生命の源ともなるお米を作り出す稲作を、ぜひとも未来に引き継いでいかなければならないと思います。そのためにも“未来からの留学生”である児童の皆さんが稲作を体験し、稲作について学ぶことは、日本の文化、食糧事情、将来持続可能な農業について考えるためにとても意義のあることだと考えます。

秋には黄金の穂波が揺れるようになり、その後稲刈りを行います。育てる喜び、実りを得る喜びを実感してほしいと思います。

## 読書のこと

6月に読書週間がありました。細かなことは図書日より7月号をお読みいただきたいと思います。保護者の方に読み聞かせをしていただいたり、本の紹介をしたりと本校でも読書推進のためにいろいろな取り組みをしています。趣旨にご賛同いただき、読み聞かせにご協力くださった保護者の皆様には心より感謝申し上げます。

中央市の教育振興基本計画でも「生涯成長」をコンセプトに図書館活動の推進を掲げ、新入生へのブック

プレゼントやボランティアの方による読み聞かせ活動を行っています。

ところで、ご家庭での読書の様子はいかがでしょうか。昨年、ベネッセと東京大学社会科学研究所が行った調査によれば、小1から小3でみると30.2%、小4から小6で見ると45.5%が平日に読書をしない(0分)と回答しているとのことでした。

ICTが発達し、多くの情報がすぐ手に入れられるとても便利な時代となりました。それに反比例するように読書の時間も減っているように思われます。

小学生の低学年では絵本や童話などの作品を読むことが主になりますが、中学年、高学年と学年が上がるにしたがい、だんだん難しい文学作品を読むようになっていきます。

この文学作品、ただの作り話ではありません。作者が作品の中に人としての生き方や人との関わり方、ものの見方や考え方を作者なりの解釈を入れて私たちに示してくれているのです。読む側は作品を読みながらイメージをふくらませてその内容を追体験し、心の栄養として取り入れ、学びを深め心も育っていくのです。ただこれは意識して行うことではありません。いろいろな本を読んでいるうちに自然に備わっていくのです。まさに「生涯成長」です。これこそ読書の効用であると思います。

「読書は、私たちに未知の友人をもたらす」—オノレ・ド・バルザック（フランスの小説家）

「今日の読書こそ、真の学問である」—吉田松陰（幕末の志士）

一日10分とか15分といった時間からでよいので、読書を続けていってほしいと思います。

## ミニコンサート・歌広みなみ

6月24日(月)、25日(火)、27日(木)の中休み帯にミニコンサートが、28日(金)の朝には歌広みなみが行われました。歌、ダンス、合奏など、各学年の児童のみなさんはこれに向けて一生懸命に練習を行い、思い思いに工夫を凝らした表現活動を行いました。多くの保護者の皆様にもご参観いただきました。ありがとうございます。



## 七夕

7月7日は「七夕」です。

本校では児童会が中心となって「七夕集会」の準備を進めており、七夕の意味や由来など、クイズやゲームなどの企画をしていて、5日(金)の3校時に集会を行う予定でした。しかし、暑さが厳しくなってきたため、体育館での実施は熱中症等も予想されたために集会は行わず、児童会



執行部による七夕のお話を放送で流すこととしました。また、各階のフロアに用意した竹に子どもたちがそれぞれの願い事を書いた短冊を飾りました。短冊には大きな夢からささやかな夢まで、思い思いの願い事が書かれておりました。

みなさんの夢や願い事がかないますように。

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ

(百人一首 36番 清原深養父)

—今のことばにすると—

夏の夜は（とても短いので）、まだ宵（夜の初め）だと思っていたのに、もう夜が明けてきてしまった。はてさて、雲のどのあたりに月は宿をとっている（住みかとしている）のだろう。

平安貴族の朝は現代と比べるととても早いものでした（午前3時過ぎには起きていたとか）。夏場は起きて少したてば空がうす明るくなってきたことでしょう。そんな様子の中で、月を人に見立てて、夜が明けても空に残る月（有明の月）が沈まないで雲にかくれている様子を歌っています。

この歌の作者である清原深養父は10世紀前後の貴族で歌人だった人です。枕草子の作者である清少納言（大河ドラマ『光る君へ』でファーストサマーウイカさんが演じています）の曾祖父（ひいおじいさん）になります。